

れんげ 蓮華の花がひ～らいた

蓮の花を見ると、「ひ～らいた、ひ～らいた、何の花がひらいた、蓮華の花がひらいた」のわらべ歌を思い出します。

このわらべ歌の「蓮華」は、水を張る前の田んぼに咲く小さな紅紫の花、蓮華草（別名「ゲンゲ」の花）を思い浮かべる方もいらっしゃるかと思いますが、ハスの花のことです。歌に唄われているとおり、朝開いたハスの花は昼過ぎにはつぼみ、翌朝にまた咲きます。そして3～4日間咲き、最後は閉じることなく散っていきます。

「花は開いてすぐつぼむ。しかし、現実を見据え、しっかりと生きてゆけば、花は必ずまた開く。人生をあきらめることなく、夢を持ち、悲しみを乗り越えよう・・・」と言っているようです。

ハスには、とてもよく似ているスイレンがあり、しばしば混同されます。しかし、分子系統学的研究によるとスイレンとハスは系統が異なるそうです。両者の違いの一つには、花の咲き方があります。ハスは茎が伸びて水面より高いところで花が咲き、スイレンは水面に浮いているように花が咲きます。

この異なる二つの花ですが、仏教では、ハスとスイレンをともに「蓮華」といいます。

仏教のシンボルフラワー「蓮」

「蓮は泥より出でて泥に染まらず」

泥から生え、泥に染まらず気高く咲く花、まっすぐに大きく広がり水を弾く凛とした葉の姿は、「泥にもがくような辛いことや嫌なことが多い人生でも、心は汚れさせずに美しく咲きましょう」という姿勢を想起させます。この姿勢は仏教の教えに通じると考えられ、このことから蓮が仏教を象徴する浄土信仰の花になったのだと思われます。

蓮の花は仏教には欠かせないものです。様々に意匠されている如来像の台座は、蓮華をかたどっています。仏教の石塔の一種である板碑には種子（神仏を表す梵字）の下に蓮華座があることが多くあります。また、主に寺院では仏前に「常花」と呼ばれる金色の木製の蓮華が置かれています。「南無妙法蓮華

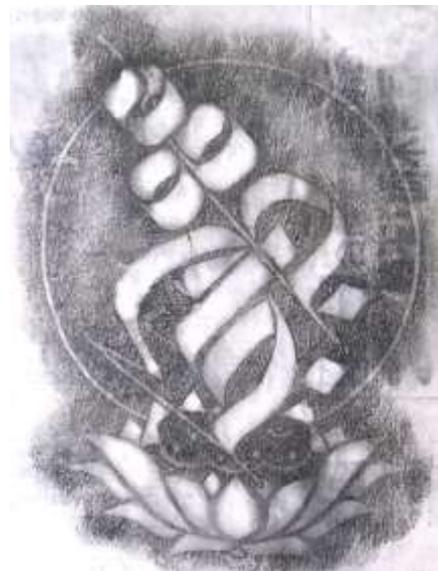
市民学芸員 中島 哲雄



園内の行田蓮

経(なむみょうほうれんげきょう)」という題目もあります。ここにも蓮華が出てきており、その意味を簡単に言うと「白く美しい蓮華のような仏教の素晴らしい教えを信じ守ります」という事になるそうです。また、極楽浄土に往生した人は蓮の花の上に座るとされており、「一蓮托生」とは、死後、同じ蓮に身を託す、すなわち死ぬまで運命を共にすることを意味します。

行田市から分けていただいた難波田城公園の「行田蓮」。今年も美しい花を咲かせました。皆さんはどのような思いで鑑賞されたのでしょうか。



阿弥陀一尊種子板碑・部分（当館蔵）

市民学芸員のページ *このページは市民学芸員が原稿を執筆、編集しました。

難波田城 ちょっと拝見 みどころ紹介

石造物シリーズ①『庚申塔』

私たちが何気なく使っている干支は甲子園(一九二四年)、戊辰戦争(一八六八年)など西暦や元号と同じく時を表す言葉です。古代中国で使われた十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)の漢字を組み合わせて、年も日も六十周期で繰り返します。庚申もその一つです。ちなみに次の庚申の日は九月二十五日です。

中国から奈良時代頃伝わった道教の説に『庚申の日の夜には、人中にいる三戸という虫が、主人の寝ている間にその悪行を天帝に言いつけに行き、寿命をも縮めさせる』というものがあります。貴族たちは、三戸の虫が出て行けぬように徹夜したといわれます。その後、庚申信仰は、遊興の要素を採り入れ、武士、農民層へも広がっていきま

す。江戸時代に入り、農民たちに定着した庚申信仰では、庚申待を三年・十八回続けた記念に庚申塔を造立しました。本尊として不老長寿・無病息災を願う仏教系の青面金剛が多く祀られ、庚申の別の読み庚申に因み三猿(見ざる言わざる聞かざる)が多く彫られたともいいます。

この庚申塔、市内には四十基近くあります。しかし、近年は信仰の衰退、宅地造成などで減りつつあります。園内の二基の庚申塔も市内にあったものが移設されたものです。(磯部 正博)

参考文献『日本石仏事典』庚申懇話会 『富士見の庚申塔』資料館友の会拓本部会



園内に二基ある庚申塔のうちの一基。田んぼの向かいに立っている。青面金剛、三猿が彫られている。市内、上沢地区より移設されたもの。

おもしろ・なつかし体験⑤9

昔のあそび体験

このコーナーは、難波田城公園での体験学習やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

難波田城公園では、古民家ゾーンにある納屋の前に、昔懐かしい遊び道具が置いてあり、自由に遊ぶことができます。7月29日のちょこっと体験は、その一部を紹介しながら一緒に遊ぶ企画でした。

おはじき・ビー玉遊びの基本は、指ではじいたり、投げたりしてぶつけて取り合いっこすることです。ビー玉を目の高さから地面の玉に当てる「目玉おとし」は、簡単そうで難しく、参加した子供たちも何回も挑戦していました。お手玉は、投げて受けるいろいろなわざで遊びます。2個は難しいようです。

さて、今回一番盛り上がったのはコマまわしでした。ポイントはヒモの巻き方と投げ方です。フラフ

ープの輪を利用してコマの土俵とし、その中に投げつけて回します。なかなかうまく回らなかったり、土俵に入らず飛んでいたり悪戦苦闘。意外にも子ども頃遊んでいた方や、今回初めての大人たちが熱中していました。みんなでコマを投げ入れ、コマをぶつけあったりして戦っていました。

ヒモを巻くのが難しい小さい子供たちには、手で回すいろいろなコマが人気でした。

(横溝 敦子)



人の創ったもの★人の使ったもの

富士見・セルビア友好の原点

本年の難波田城公園まつりに、セルビア共和国大使が参加されました。これは、同国のシャバツ市と富士見市が姉妹都市だという縁によります。両市は、1982 年から姉妹都市提携をしています。5 月 21 日から 6 月 10 日には「富士見市・セルビア友好記念展」も開催しました。その展示資料から紹介します。

セルビアと日本を結ぶ義援金

1990 年代、ユーゴスラビア連邦が解体する過程で、多くの内戦が起きました。相次ぐ戦乱で疲弊したセルビア共和国の復興に、日本は率先して支援の手をさしのべました。

2011 年、東日本大震災による甚大な被害に対し、セルビアの人々はいちはやく支援に動き、総額約 3 億円の義援金を送っていただきました。当時の同国の経済規模は日本の約百分の一で、破格の厚情が示されました。

2014 年 5 月、セルビアに 100 年に一度といわれる大洪水が襲いました。それを知った日本の人々は、インターネットを活用して支援の輪を拡げました。同年の難波田城公園まつりでも、募金活動に取り組みました。

大正 4 年(1915)の義援金

当館に寄託された古文書の中に、今から 100 年以上前に、セルビアに向けた義援金を集めた記録があります。時は 1915 年、水谷村の村長が各区長（現在の町会長）に出した文書です。

当時セルビアは、第一次世界大戦の渦中にあり、大国オーストリアとの厳しい戦いに耐えていました。1912～13 年のバルカン戦争に続く戦乱で、食料や医薬品すら乏しい状況に追い込まれていました。セルビア出身で東京外国語学校（現・東京外国語大学）のロシア語教師を務めていたドゥシャン・トドロヴィチは、母国のため募金活動を始めました。

日本赤十字社が窓口になり、全国から義援金を募りました。水谷村の動きもそれに応じたものです。配付された資料をただ回覧するのではなく、村長自身の言葉を加えています。富士見とセルビアの友好の原点といえるでしょう。（早坂 廣人）

このコーナーでは、地元に関する資料を紹介いたします。今では使われなくなったものからわたしたちの身近な歴史をひもといてみたいと思います。

大正四年九月十四日

水谷村役場

区長殿

一般へ

塞国救難義捐募集の件
昨年欧州戦乱勃発以来我
日本赤十字社においては
露、英、仏、三ヶ国に救護
班を派遣し、露国はペト
グラードに、仏国はパリに、
英国はロンドンにおいて、
各病院を開き各国の傷病
兵を救護しつつあり。しか
して塞国には衛生材料を
寄贈したり。同国よりは之
れに対し感謝せらるると

同時に、現今東京外国語学校に教師たるトドロウ氏（生国はセルビヤ人、国籍は露国）に宛て、同国の窮状を訴え日本国の救助を請い来れり。別紙は同セルビヤの現況なれば、よくその景況を熟読し、自分と同国民とを対照し、吾人の安全幸福なる生活を謝すると共に、セルビヤ国民に対し応分の義金を為すことにおいて、やぶさかならざりし事を切望す

規定抜摘

- 一、義金は一口金十銭とす 但し一人幾口にてもよろし
- 二、出金は九月三十日までとす
- 三、取扱所は当村役場内とす

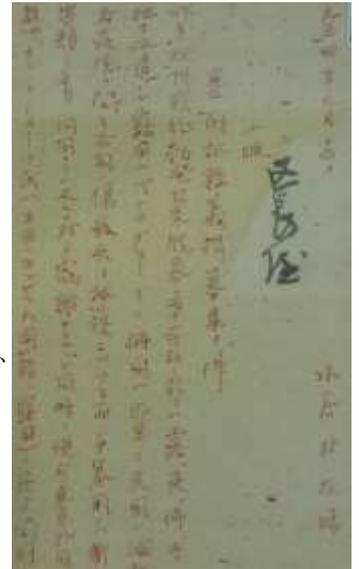
以上

別紙

（本文の要約）セルビヤは小さな国だが、悲惨な戦いを繰り返して独立を維持してきた。今回はオーストリアとドイツの大軍を相手に、武器弾薬も乏しい中、必死に戦っている。敵軍が侵入した地域では住民がひどい目にあい、死屍累々たるありさまである。国内には傷病者が充満しているが、病院も医薬も欠乏している。食料も欠乏し全国民が飢餓に直面している。

付言

諸君は以上を見てその感、如何。セルビヤ人も人類にして諸君と等しく最愛の子女もあり、最愛の姉妹もあり。憐なる老人もあらん。しかして今彼等は凶悪なる奥（オーストリア）独（ドイツ）軍と、その国のために生死の境に立て、進まんか死あるのみ、退かんか我が国を如何せん。闘うに弾丸なく、争うに刀なく、食するに糧なし。その国苦、酸鼻の極みというべし。朝に不景気の嘆声をかこちて、夕に酒店の簾をくぐり、農家日常の衣装に、憚らず粉脂を塗り紅袴を装い野草の舞楽を弄するの徒は、よろしく朝夜業を励み、余利を計画して相当の義金を出し、この勇猛なる国民を救助せられんこと、切に余の望むところなり。 《水谷村長》



* * 秋のイベント予定 * *

●富士見市協働事業提案制度採択制度 ほうき作り技能伝承者育成講習会

市内で盛んだったほうき作り。その技を伝承するための講習会です。

とき／9月30日(日)、10月21日(日)、11月11日(日)、25日(日) 午前9時30分～午後4時

会場／講座室 定員／6人(応募多数の場合は、9月14日(金)までに申込みの方から選考) 対象／4回

すべてに参加でき、講習会後に伝承に携われる方
講師／浦野幸吉氏(元ほうき職人) 申込み／随時

主催／難波田城いきものがかり・難波田城資料館

●富士見市児童・生徒社会科展

市内小中学生による、夏休みの自由研究の作品を展示します。各校から選ばれた約80作品です。

会期／9月29日(土)～10月8日(祝)

会場／特別展示室

●平成30年秋季企画展「村人たちの明治」

明治という新時代、押し寄せる様々な新制度や文化に、地域の人々がどのように対応したか探ります。

会期／10月13日(土)～1月6日(日)

会場／特別展示室

●穀蔵常設展示「富士見の職人たち」

かつての暮らしを支えた職人、地域の歴史を彩る職人の道具や製品を紹介しています。

展示内容／竹かご、座敷ぼうき、張り子面、砲丸

●ふるさと体験「お月見だんごづくり」

とき／9月24日(振) 午前10時～正午

定員／8組(申込み順) 参加費／1組500円

会場／旧金子家住宅 協力／市民学芸員

申込み／9月1日(金)～15日(土)に電話で

●拓本体験教室

石碑の文字を和紙に写しとる「拓本」を体験します。作品はカレンダーに仕上げ、持ち帰れます。

とき／9月29日(土) 午前10時～午後3時

会場／講座室

定員／8人(申込み順) 参加費／500円(材料代)

持ち物／昼食 申込み／随時。直接または電話で

指導／資料館友の会拓本部会

●ふるさと探訪 志木の史跡と文化財を巡る

とき／10月14日(日) 午前9時～午後3時

集合／柳瀬川駅東口 定員／30人(申込順)

参加費／500円(当日集金)

申込み／9月1日(土)～10月11日(木)に電話で

主催／資料館友の会ふるさと探訪部会・難波田城資料館

●古民家で昔話

とき／10月20日(土)

午後1時30分～2時、午後2時30分～3時

場所／旧大澤家住宅 おはなし／すぶんふる

●さつまいも掘り(試食あり)

とき／10月28日(日) 午前10時～正午

(小雨決行。悪天候の場合翌週に延期)

定員／30組(申込み順) 集合場所／旧金子家住宅前

参加費／1組1,000円。1人で参加の方は他の方と組んでいただく場合があります。

申込み／9月30日(日) 午前9時から電話で

主催／難波田城公園活用推進協議会・難波田城資料館

●古民家コンサート

とき／10月28日(日) 午後1時30分～2時

会場／旧大澤家住宅 出演／川上拓人(ヴァイオリン)

定員／100名程度(当日先着順) 参加費／無料

主催／難波田城公園活用推進協議会・難波田城資料館

●扇だこづくり

かつて富士見市の特産品として知られた郷土民芸「扇だこ」をつくります(全2回)。

とき／12月1日(土)・2日(日)

午前10時～午後3時

会場／講座室 定員／8人(中学生以上、申込み順)

参加費／1,000円(材料代)

指導／扇だこ保存会 申込み／随時。電話か直接

ちよつ蔵市(難波田城公園活用推進協議会主催)

9月30日(日)おはぎ

10月28日(日)ふかしいも

11月はお休み

11時より販売。売り切れ次第終了

※他にも様々なイベントがあります。詳細は、広報ふじみ、公式サイトなどでお確かめください。

田舎まんじゅう販売
第1.3日曜日 10:30～
お月見亭
(予約制手打ちうどんランチ)
第2火曜



富士見市立難波田城資料館

〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1

<http://www.city.fujimi.saitama.jp/30shisetsu/11nanbadajyo/index.html>

Tel. 049-253-4664 Fax. 049-253-4665



資料館公式サイト

◆休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土・日・祝日を除く)、年末年始 開館時間／午前9時～午後5時

◇公園休園日／なし 開園時間／午前9時～午後6時(4月～9月) 午前9時～午後5時(10月～3月)